

Girl in Blueにおける男装

谷口, 秀子

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際共生学講座

<https://doi.org/10.15017/7151996>

出版情報：言語科学. 49, pp.1-6, 2014-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



*Girl in Blue*における男装

谷口秀子

1 はじめに

Girl in Blue (2001)は、南北戦争が勃発した1861年のアメリカを舞台に、男装して兵士として従軍する16歳の少女 Sarah Louisa Wheelock を主人公とするヤングアダルト向け小説である。この作品について、作者の Ann Rinaldi は、男装して兵士となり南北戦争に従軍した実在の女性 Sarah Emma Edmonds (1841-1898)の逸話に着想を得たことを明らかにしている。(Rinaldi 303) また、*Girl in Blue* の主人公の愛読書である *Fanny Campbell, the Female Private Captain* (1844)は、男装して船乗りになる女性の物語である。このように、男装のモチーフは、*Girl in Blue* においてきわめて重要な要素となっている。

本論文では、*Girl in Blue*における女性主人公 Sarah の男装に焦点を当て、ジェンダーの視点から考察する。その際、*Girl in Blue*において、男装が Sarah にとってどのような意味を持ち、どのような影響を彼女にもたらすのかを分析し、Sarah の男装の物語を通して、作者が提示しようとするジェンダー観・女性観を明らかにする。(なお、本論文では、男装とは、女性が男性の衣服を着て性を偽り男性として振る舞うこととする。)

2 男装の意味と働き

*Girl in Blue*に限らず、女性主人公が男装をする作品を考える際に、ジェンダーの視点は不可欠である。言うまでもなく、衣服は男女の性別およびジェンダーを象徴的に示すものであり、異性の衣服を着ることには、ジェンダー越境的な意味合いが強いからである。特に、19世紀半ばのアメリカを舞台にした *Girl in Blue* のような、男女の衣服に大きな違いがあり、女性に対する制約が多く、男女のジェンダーの非対称性の度合いが大きい社会を舞台とする作品においては、男装は、女性主人公にジェンダーを越境させることにより、女性のままであれば得ることのできない自由や主体性を獲得することを可能にする有効な手段となり得る。このように、物語の中で女性が男装して男性として振る舞うことは、男性の記号の一時的な借用であるとしても、女性の行動の幅と可能性を拡げるという意味で、女性登場人物のエンパワーメントの装置となる。とりわけ、女性の活動が、家庭という個人的な領域に限られる当時の社会において、男装は、女性主人公が、ジェンダーの制約なく、男性と同等以上の社会的な活躍をすることを可能にするのである。

*Girl in Blue*における Sarah の男装は、他者に強いられたものではなく、彼女自身の意思によるものである。また、*Girl in Blue* は、女性主人公が家を出て男装して従軍するというヤングアダルト小説の男装のパラダイム (Flanagan 113) を踏襲している。ヤングアダルト小説において

は、自ら男装することを選ぶ女性主人公は、男装をする前から活発で意志が強く主体的な女性像であることが多く、*Girl in Blue*の主人公である Sarah も同様である。従って、ヤングアダルト小説における男装は、もともと活動的で意思の強い女性主人公が、女性という性別だけを理由に行動の制約を受けることを不満に思い、活動の場を求めてジェンダーを超えるための装置であることが多く、トランスジェンダー的な意味合いが含まれる例は多くない。

ミシガン州の農場育ちの 16 歳の Sarah が密かに家を出るに至るのは、父親が体現する、女性を抑圧する因習的で家父長制的な価値観への抵抗のためであると言っても過言ではない。Sarah の父にとっては、妻や娘は自分に隷属し奉仕する存在でしかなく、Sarah にとって父が支配する家は、“It was not home to her. It was a place to get away from. I misdoubt, she thought, that the slaves in the South been worst treated than me.” (15)とさえ思われるのである。作者は、Sarah が家を出た後も、暴力的な父の横暴さと父に従い疲れ果てた母の姿を Sarah に繰り返し思い出させることにより、女性を制約する因習的なジェンダー構造の存在とそれに対する Sarah の抵抗感を強調する。

支配的で暴力を振るう夫に虐げられ夫の言いなりになって生きる母のような人生を送ることに嫌悪感を抱いている Sarah は、父の度重なる暴力と父が無理強いする結婚から逃れるために家出をするのであるが、彼女の家出は、困難な現状からの単なる逃避ではない。家を出るにあたって Sarah が兄に告げる “I’ll have a place of my own. A Life of my own.” (15)という言葉、および、軍に入隊した後の “She wanted to be independent, earn her own way, be free of all bonds.” (33)という記述に表われているように、彼女の家出は、主体性を持ち自立した生き方を追求するための行為でもある。Sarah は、その目的のために、長い間あこがれていた *Fanny Campbell, the Female Private Captain* の主人公 Fanny のように、髪を切り男装をして、男性として兵士になることを選ぶのである。

男装した Sarah は、年齢を従軍可能な 18 歳と偽り、Neddy Compton という男性として北軍に志願して兵士となる。ここで、男装は、Sarah の因習的な女性ジェンダーからの脱出を可能とする。すなわち、Sarah の男装は、当時の女性には認められなかった兵士としての従軍を、女性である Sarah に可能にするという意味において、ジェンダー越境装置として機能しているのである。さらに言えば、男装は、ジェンダーの制約から Sarah を解放することによって、彼女が兵士になることを可能にし、当時の女性の手には入らなかった社会的な活躍の機会を彼女に提供しているのである。

確かに、男装は、Sarah にジェンダーを越境させ、兵士となることを可能にするのだが、Sarah は男装する前から兵士としての十分な技能と能力を備えていたという事実にも、留意する必要がある。Sarah が男装してまでも軍隊に入ることを望むのは、下の引用のように、自分の銃の腕前などについて、並の男性には決して負けないという自信があったためであり、その実力を、奴隷制の廃止という大義を掲げて戦っている北軍のために役立てたいと思ったからである。また、そのような社会的な働きをすることが、彼女にとっての存在証明であり、自己実現の手段なのである。

... She took pride in her accomplishments, in being the best shot in the country, in knowing she could ride and swim better than the Bronson Brothers in her town of Casey's Mill, between Flint and Pontiac. (6)

If only she could drum, she thought. Or bugle. But the skills she had were far superior. She knew how to tend wounds, shoot a gun, ride, swim, stand up to the sun of a long summer day. Weren't such talents needed? (18)

She didn't concern herself as much with the larger lie, passing as a man. She knew she could do that. Hadn't she spent years now doing a man's work? Dressing in a man's clothes? Likely she could shoot and ride better than all these recruits. (20)

Sarah の銃や水泳などの腕前に対する自信が彼女の単なる思い込みではないことは、入隊後の彼女の戦場での働きによって証明される。また、兵士としての Sarah は、上官からも “One of my best”(123)、“such a good soldier”(127) と高く評価され、昇進を考慮されるほどであることから、彼女の兵士としての能力の高さは明らかである。また、Sarah は、“You look like a strong lad. From a farm?”(51)と言われるほど、しっかりとした体格の持ち主でもある。

また、このような、兵士としての優れた能力や資質がある Sarah が、時代の制約とは言え、女性であるために軍隊に入ることができず、性を偽り男性のふりをしなければ、その能力を発揮する場を与えられないということ、換言すれば、能力があっても女性であるという理由だけで、その能力を社会で生かすすべがないという社会の制約が、兵士として男性に伍して活躍する Sarah の姿によって、逆に浮かび上がってくることになる。そして、Sarah が女性であることが明らかになり、性を偽って志願したことに対して罪を問われる可能性があることを上官から聞かされたときの、““Jail, Sir?” Sarah felt her face go white. Jail for wanting to serve her country?”(124) という Sarah の反応は、国に尽くすために従軍して活躍した自分が、男性であれば昇進するところを女性であるために罪に問われるというジェンダーのダブルスタンダードを照射するのである。

3 男装がもたらす視点

Girl in Blue における主人公 Sarah の男装は、彼女がジェンダーの境界線を越えることを可能にし、男性と伍して持ち前の技能と能力を発揮する場を提供するための装置である。しかしながら、本作品は、男装した Sarah が兵士として男性に勝るとも劣らない活躍をする、強く勇敢な女性の痛快な冒険物語にとどまってははいない。むしろ、*Girl in Blue* においては、男装した Sarah が、当時の普通の女性には不可能であった、軍隊や戦場での体験をすることによって獲得する視野の広がりや理解の深まりにも、かなりの重点が置かれている。この意味で、*Girl in Blue* における男装は、主人公の社会的視野を広げ認識を深める役割をも、担っているのである。

兵士としての経験をするることによる Sarah の認識の深まりは、彼女の戦争についての認識の変

化に端的に表れている。軍への入隊間もない Sarah は、同僚の新兵たちが抱いている、奴隷解放という大義を掲げたこの戦争に対する、以下のような、冒険物語的な勇ましい戦いのイメージを共有している。

... She heard words like, "truth and freedom," and "putting down the rebellion," and "going after those damned Rebels."

All these young men believed in the cause, she decided. From the sound of it, some were taken with the very romance of preserving the Union. ... She felt a kinship already with these two dozen souls who had come from farms and shops and schools to defend what they believed in. She would do well here, she decided. She had done the right thing. (32)

当初 Sarah がこの戦争に対して抱いていた漠然とした勇壮なイメージは、彼女が軍隊や戦いの場で直面する様々な現実の前に、修正を余儀なくされる。Sarah は兵士として、たとえば、部隊の劣悪な衛生環境による病気の蔓延、行進や訓練の過酷さ、戦闘の凄まじさと悲惨さ、人間を銃で撃ち命を奪う経験、戦場での命の危険、多数の犠牲者を出した戦闘の敗北、不十分な設備と食料と薬品の不足による窮状、命がけの任務の遂行などを体験し、子ども向けの冒険物語における戦いとは異なる、戦争の真の姿を知る。

また、兵士として戦いを経験する中で、Sarah の視線は、それぞれ大義を抱く北軍と南軍との間の組織としての戦いだけでなく、戦いに携わる個としての兵士たちにも向けられる。Sarah は、戦闘前夜の兵士たちの抱く大きな不安感、重傷を追っているにもかかわらず、気落ちした Sarah を助け励ましてくれた見知らぬ兵士の優しさ、戦闘の後、Sarah を休息の場から排除しなかった南軍の兵士たちの寛容さ、そして、自分が銃で命を奪った敵の将校への自責の念、さらには、ロケットを妻に渡してくれるように託す瀕死の若い兵士の妻子への思いなどを知り、大義を掲げる戦争の内側でもがく生身の人間の姿を実感する。加えて、Sarah は、兵士の直面する戦いの現実に加えて、夫と2人の息子を戦争で亡くし、戦争や兵士全体への憎しみを募らせるあまり、Sarah と上官を殺そうとする女性をはじめ、戦争に翻弄される女性たちの現実も目の当たりにする。このように、*Girl in Blue*において、作者は、兵士としての Sarah のすばらしい活躍ばかりを描くのではなく、勇ましい兵士の活躍の場としての戦いという側面以外の戦争の側面を Sarah に見せることにより、Sarah の認識を深め、精神的な成長につなげるのである。その結果、Sarah は、戦争に対する認識を深めた上で、奴隷解放という大義と国のために尽くすことを改めて決意するのである。

4 男装のない物語の意義

これまで論じてきたように、*Girl in Blue*において、女性主人公 Sarah の男装は、きわめて重要な要素となっているが、Sarah が女性であることを暴かれ、部隊を追われ男装を解いて女性の

姿に戻った後も、彼女の活躍を描く物語が続く点は、注目に値する。

女性主人公が男装する作品の中には、主人公が男装を解いて女性の姿に戻る時点で物語が収束に向かい、主人公と理想化された男性との結婚で結末を迎えるものが少なくない。(たとえば、*Girl in Blue*の主人公 Sarah と同様に、自らの意思で男装して従軍し大きな戦功を立てる女性を主人公とするアニメ映画 *Mulan* (1998)も、その例に漏れない。)このような、男装によってジェンダーを超えた主人公が、男装している間は持ち前の能力を発揮して男性に勝るとも劣らない華々しい活躍をするものの、女性であることが他人に知られると、女性の姿に戻ってすぐに理想的な男性と結婚するというパターンは、女性は、男性の記号を借りて一時的にはジェンダーを超えて社会的な活躍ができるとしても、結局は、因習的な女性役割に戻って結婚するのが幸せであるという印象を読者に与えかねない。従って、せつかく男装というジェンダー越境装置を使って、ジェンダーにとらわれない主体的で自立した女性像を造り出したとしても、女性のエンパワーメントは一時的な借り物のエンパワーメントであるという印象を免れないのである。

一方、*Girl in Blue*においては、Sarah が女性であることが暴かれ兵士をやめて女性の姿に戻った後も、さらに物語が進行する。実際、*Girl in Blue*は、大きく分けて、Sarah が男装して兵士として活躍する前半の部分と女性の姿に戻って北軍のスパイとして活動する後半の部分から構成されており、Sarah の女性スパイとしての活躍の部分は、男装の部分の分量を上回り、作品全体の頁数の半分以上を占めている。前半後半の2つの物語は、分断されることなく、有機的につながっており、Sarah は、女性であることが暴かれた後、彼女の兵士としての技能と能力と変装の巧みさを高く評価する上官から、性を偽って入隊したことの罪を免じる代わりに、才能を生かしてスパイになることを勧められ、彼女は、スパイとして国のために尽くすことを決意する。このように、*Girl in Blue*においては、Sarah が男装を解き女性の姿に戻った後も、彼女が能力を発揮できる場は確保され、国に尽くしたいという当初からの願いは、一貫して保持されるのである。この意味で、Sarah が男装して男性になりすますことによって成し遂げられたジェンダー越境とエンパワーメントは、彼女が男装をやめた後も、失われることはない。

作者は、このように、Sarah が男装を解いて女性の姿に戻った後も、持ち前の能力と兵士としての経験を生かして、有能なスパイとして実力を発揮する物語を描くことにより、彼女がもはや男装という男性の記号を借りなくとも社会で立派に通用することを示している。また、兵士として発揮した能力や体験による視野の広がりやそれに伴う認識の深まりと精神的な成長も、後半の部分の女性の姿に戻った Sarah に受け継がれ、国のために尽くしたいという彼女の強い意志は弱まることはない。このように、男装をしている Sarah と男装をやめた後の Sarah の間には連続性があり、男装によって Sarah にもたらされたエンパワーメントは男装をしているときだけの一時的なものではなく、その後も引き継がれていくのである。作者は、Sarah が、男装をやめた後もスパイとして北軍のために今まで以上の貢献をする様子を描き出すことにより、男装によって機会を与えられたことによる彼女のエンパワーメントは、男装が終わっても続いていることを示している。ここで、Sarah は、男装が終わればすぐに結婚して再び女性のジェンダーに絡め取られかねないような男装の主人公とは全く異なる男装の主人公であることがわかる。そして、男性の記号を借りず、女性として能力を発揮して活躍を認められる Sarah の方こそが、読者にとって、

自立した主体的な女性像としてのより良いロールモデルとなるであろう。

5 終わりに

男装の女性主人公を扱ったヤングアダルト向けの物語の作品数は、全体としてそれほど多くはないものの、依然として創作され続けている。本論文で扱った *Girl in Blue* もそのひとつであり、家出、男装、従軍というお決まりのパラダイムを踏襲している。男装の作品には、女性主人公にジェンダーを越境させることにより、女性である主人公が、ジェンダーの制約なく自由闊達に行動し、男性をしのぐ大活躍をすることができるという爽快感がある一方で、男装は、ややもすれば、男性の記号を借りた一時的なエンパワーメントを演出するに過ぎず、かえって女性と男性の非対称性を強調しかねない懸念もある。しかしながら、*Girl in Blue* は、男装を解いて女性に戻った後の主人公 Sarah の社会的な活躍を描くことにより、彼女が男装時に発揮した能力の高さが仮のものではなく、彼女は、活躍の機会を与えられれば、男装という男性の記号を借りなくても高い能力を発揮できるということを示している。この意味で、*Girl in Blue* における男装は、女性主人公の能力を引き出すきっかけであり、作者は、男装を解かれた主人公をジェンダーに満ちた因習的な社会に戻すのではなく、能力と適性があれば性別に関わりなく活躍できるスパイの世界を準備することによって、1861年当時の社会状況と矛盾しない形で、主人公の活躍を保証している。*Girl in Blue* は、女性にとってのジェンダーの制約が大きい19世紀半ばの社会を舞台にした作品ではあるが、男装以降のエンパワーメントの継続という、きわめて現代的な視点を持っていると言えよう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費(23520309)の助成を受けたものです。

引用・参考文献

- Flanagan Victoria. (2008). *Into the Closet: Cross-Dressing and the Gendered Body in Children's Literature and Film*. New York & London: Routledge.
- Rinaldi Ann. (2001). *Girl in Blue*. New York & Toronto: Scholastic.
- 谷口秀子. (2000). 「おとぎ話のジェンダーとフェミニズム」. 『言語文化論究』 11: 29-38.
- _____. (2002). 「少女漫画における男装—ジェンダーの視点から—」. 『言語文化論究』 15: 105-114.
- _____. (2009). "Yamambas, an Alternative to Gender-Stereotyped Heroines, in Contemporary Children's Books in Japan: A Step Forward from Tough Heroines in Comics." 『言語文化研究』 24: 67-78.